

靈異記の殺牛祭神系説話

—— 檐磬嶋の話を中心に ——

黒 沢 幸 三

(一) 中巻二十四話の問題点

靈異記中巻二十四話には前もって説明すべき二、三の問題がある。まず本話の主人公、檐磬嶋であるが、彼について「奈良の地名による姓か」とみて、多分に一般的な呼び名のように考えるむきもあるが、この「檐」は奈良ではない。昭和三十三年天理市岩屋町西山（ワニ氏の本拠地内にあたる）にて発掘された墓誌に「大檐君素止奈」とあるように、君姓を持った新羅系の渡来人で、現天理市櫛本町檐周辺に蟠居していた^①。そもそも櫛本周辺は古代豪族ワニ氏の拠点で、檐君氏はその支配下にあつたと思われるが、ワニ氏の勢力の北上につれて檐君氏一派が大安寺近辺に居住することは十分ありうる。しかも檐嶋は大安寺の「修多羅分の銭」を借用して越前の執賀へ「交易」に行ったとあるが、これまた架空の話ではないだろ

う。土橋寛氏は「この蟹やいづくの蟹、百伝ふ角鹿の蟹……」（記四十二番）の歌謡の前半を、敦賀地方のワニ部が族長のワニ氏に蟹を貢納する時のほがいの歌と説いている^②。つまり敦賀から櫛本へのルートはほぼワニ氏の勢力圏で、このほがいの蟹のルートと檐嶋のたどるルートは一致しているのである。概して説話は実際にあつたことを核として話すという性格が強いが、檐嶋が敦賀へ「交易」に行つたといふことは、話し手・聞き手双方にとって事実譚であつたと思われる。この話の聴衆は絵そらごとに耳を傾けているのではない。

つぎに檐嶋はその帰り、琵琶湖を船にて渡る時「忽然に病を得」といふ。それで船をおり、一人奈良の家に向かおうとして、馬を借りて急ぐ。ところがあとを三匹の鬼がしつこく追ってくる。たまたりかねて事情を聞くと「閻羅王の闕の、檐磬嶋を召しに往く使な

り」との答えである。このあたりの話はなかなか写實的で、路上の歩みと話の進みがびたりと合っていて、われわれを話中に引きこむ。しかし磐嶋が急に病氣になったことと、鬼の出現はいかなる關係にあるのか。当時の人々には自明のことでもわれわれにはすぐに通ぜぬ話もある。靈異記の注釈もこの点に関しては曖昧である。だが幸いなことにこの話につづく中巻二十五話では、

讚岐の国山田の郡に、布敷臣衣女有り。聖武天皇のみ代に、衣女忽に病を得たり。時に倅しく百味を備けて、門の左右に祭り、疫神に賂ひて饗す。陥羅王の使の鬼、来りて衣女を召す。

其の鬼、走り疲れて、祭の食を見て禰りて就きて、受く。

とある。この例からみても人間の俄の病氣と鬼の出現は關係があるとしなければならぬだろう。

さきに磐嶋を追いかけた鬼たちは疲れて空腹をうったえるが、磐嶋は彼らに干飯を与える。そのつづきはつきのごとくで、われわれにはうす気味悪くひびいてくる場面である。

使の鬼云はく「汝病我氣故不依近。但恐ること莫かれ」といふ。終に家に望み、食を備けて饗す。鬼云はく「我、牛の穴の味を嗜むが故に、牛の穴を饗せよ。牛を捕る鬼は我なり」といふ。磐嶋云はく「我が家に斑なる牛二頭有り。以て進らむが故に、唯我を免せ」といふ。

まずこの白文の箇所については、一般には狩衣袴齋に基づいて「汝、我が氣に病まむが故に、依り近づかずあれ」とよまれている。だがここを『三宝絵詞』中巻十四話では「汝がやむは我けなり。ちかくはよらじ」とし、『今昔物語集』二十巻の十九話では「汝が病ハ我等が氣也。近ハヨルベカラズ」としている。この「氣」とは「塩氣立つ荒磯」(『万葉集』一七九七番)、さらに「ものけ」・「毒氣」という語もあるようにそのものから発散する精氣である。靈異記においては氣は鬼から発散しており、磐嶋は鬼に会う前からその目に見えぬ氣のために病を得ていたのである。だから白文は「汝の病は我が氣の故なり。依り近づかずあれ」とよむべきであろう。

氣の用例は上代では接辞ふうのものが圧倒的であるが、靈異記には大事な例がもう一つある。中巻一話は天平元年長屋王が殺される話であるが、それは彼が元興寺の法会において物乞ひの沙弥の頭を打ったから、その報いとして自害に追いこまれるに至ったと説いている因果譚である。ところがこの中巻一話にはつきのように後日譚とも云うべきものがついている。

唯親王の骨は土佐の国に流す。時に其の国の百姓死ぬるもの多し。云に百姓患へて官に解して言さく「親王の氣に依りて、国の内の百姓皆死に亡す可し」とまをす。天皇聞し皇都に近づけむが為に、紀伊の国の海部の郡の椒抄の奥の嶋に置く。

これから推察するに当時は鬼ばかりでなく、死人の霊も悪しき氣となつて人に作用するように考えられていたのである。私はこれを怨靈の氣と解するのだが、この中巻一話は後にも触れるように磐嶋の話と一脈通ずるものがあると云えよう。

つぎは使いの鬼と牛の穴との問題を解明したい。この關係の説明も今までは充分になされておらぬが、それでは風がわりな中巻二十四話の持ち味は掌握されないのである。すでに諸書に指摘されていることだが『日本書紀』皇極元年六月の条に

戊寅に群臣相語りて曰はく「村々の祝部の所教の隨に、或いは牛馬を殺して、諸の社の神を祭る。或いは頻に市を移す。或いは河伯を禱る。既に所效無し」といふ。蘇我大臣報へて曰はく、「寺々にして大乘經典を転読みまつるべし。悔過すること仏の説きたまふ所の如くして、敬びて雨を祈はむ」といふ云々。

とあり、『統日本紀』延暦十年九月の条に、

斷伊勢。尾張。近江。美濃。若狹。越前。紀伊等國百姓。殺牛用祭漢神。

とあり。『類聚國史』卷第十、雜祭条にも、

延暦廿年四月己亥、越前國禁行□加□屠牛祭神。

とある。これらによればわが国の古代社会において、牛を殺して神

靈異記の殺牛祭神系説話

を祭る所謂殺牛祭神の信仰があったこと、この信仰が祈雨とも関連していたこと等がわかる。しかもその神は漢神でもあった。するとここに想起されるのは、「漢神の祟に依り牛を殺して祭り、又放生の善を修して、現に善惡の報を得る縁」という題を持つ靈異記の中巻五話である。

これは漢神を祭るため牛を殺しつつづけていた者が、ある時以後悔悟して償いのため多くの放生を行ない、死後閻羅王宮で殺生と放生のどちらの報いを受けるべきかの裁判をされ、多数の支持を受けて蘇生し、九十余才まで長生した話である。この閻羅王宮の裁判において、富める主人公が牛を殺した理由は「崇れる鬼神を祀らむが為に殺害せるなり」と説明されている。すると「漢神」は「鬼神」とも云われ、しかもこれらは中巻一話の「親王の氣」と同じく崇る力を持つていたことになる。この力が鬼の氣なのである。

また同じく中巻五話において、殺された牛たちは、

是の人、主と作り我が四足を截りて、廟に祀り利を乞ひ、膾に賊りて着に食ひしを。

と云う。これから判断すれば、鬼神の毒氣を払うため病者も健康な者も牛を殺して神に捧げるとともに、その肉をわかち食べ合つたことがわかる。これが当時の殺牛祭神の具体的な姿であろう。すると磐嶋が鬼に「斑なる牛」を捧げたところのは、牛肉を好物とする鬼

神に牛を捧げて鬼の気をやわらげ、なんとか病から免れようとしたのであり、また「食を備けて饗」したのも、鬼神を饗応して撃退しようと思図したのである。つまりこの話の背景には当時の信仰や習俗がはっきりと存在するのであり、云わばこの話の制作者はそのような信仰や習俗をふまえながら、それらを生のままでは出さないで、いきいきとした会話を入れたり説明部分を脚色したりして本話を形成しているのである。かくのごとくわれわれが異様に感じとるこの奇談は、当時においては筋のよくとおった面白い話であったと考えられる。神田秀夫氏はその著『日本の説話』において、本話にてくる三匹の鬼を「落魄した帰化人の屠殺者」としているが、それはあたっていないだろう。

『今昔物語集』よりさきまにできた靈異記にもところどころではあるが『今昔物語集』と同じく、二話一類形式がみられる。その最たる例はともに信濃国小県の郡を舞台とする下巻の二十二話と同一三話である。これと並んで、冥府の使いである鬼を饗応して冥府行きを免れるという点では中巻の二十四話と二十五話は類話である。ところが鬼神と同じ漢神があらわれ、且つ牛を殺す話を含む中巻五話はすでにみたごとく中巻二十四話との間に親近性がみられる。しかもこの話も閻羅王の君臨する冥府の世界を語っている。さらにはまた長屋王の自害という史実に基づいて構成されている中巻一話は、

すでに本文を引用したように特に本稿のテーマと係わりのある部分は、紀伊の国海部郡の椒抄の奥の嶋の伝承である。ここは靈異記の編者景戒の出身地と目される同国名草郡の隣で、しかも景戒を海や航海に関連の強い古代吉士の後裔とすると、中巻一話は景戒の熟知せる郷里の伝承ということになる。後にも触れるように殺牛祭神の信仰は怨霊思想と深い関係にある。この怨霊の問題に触れている中巻一話は前の三つの話と結びつく性質を持っている。つまり以上の四つの話は一群のものと思做してよいであろう。

磐嶋の話をめぐる意味の不明確な所を検討してきたが、本話はいかのごとく孤立した話ではない。一般に説話文字は相互に無関係な断片的な話の寄せ集めで、体裁は集の形をとる。仮に関連があるとしても前後の二話に限られるのが普通である。しかるに本話には有機的に結びついている他の話があるわけだが、それらをここでは殺牛祭神系説話と呼んでみよう。この殺牛祭神系説話は同じ靈異記に見出される説話群の道場法師系説話と何らかの関係にあるのではなからうか。

(二) 中巻二十四話の形成過程

順序が前後したが中巻二十四話のあらすじを書いてみよう。

奈良の住人檀磐嶋は聖武天皇の時代、大安寺の御用商人として

寺の「修多羅分の銭」を借用し、敦賀まで商売にかけた。その帰りに病気になる、一人奈良の家へ向った。幸崎（唐崎）、宇治橋といそぐ道を三匹の鬼が追いかけてくる。気味が悪いので聞いてみると「閻羅王の使いで磬嶋を召しにきたのだ」と答える。驚く磬嶋を尻目に「実はお前の家まで行ったのだが、寺の守護神である四天王に寺のため商売に行っているのだから許してやってくれと頼まれた。こうしてお前を探し求め、空腹をかかえている次第だが何かないか」と云う。磬嶋は持參の干飯を鬼たちに与えた。「お前の病気はわれわれの気によるものだ。あまり近づくな。しかし恐れることはないぞ」と云う。それを聞いて磬嶋は当時の習慣にならない、珍味を備えて饗応した。すると鬼は本音を吐いて、「われわれには牛の肉が好物なのだ。準備してもらえないか。牛をとる鬼とはわれわれのことだ」とはっきり云う。磬嶋はすかさず「牛の肉は進ぜるから冥府行きは勘弁願いたい」と頼みこんだ。ここで取引きは成立し、施しに対して恩を感じている鬼たちは相談の結果、磬嶋と同じく戊寅生まれの相八卦読（易者）を代りとして連行することになった。そして鬼たちは「閻羅王に罰せられるのを脱れるため、われわれの名を呼んで、金剛般若経百巻を読んでくれ」と、それぞれの名を告げて消えて行った。翌日みると磬嶋の家

靈異記の殺牛祭神系説話

の牛が一匹死んでいた。磬嶋はいそぎ大安寺の南塔院へ行き、当時まだ沙弥であった仁耀法師にことの次第を話した。仁耀が二日かかって百巻のお経を読みあげると、翌日鬼はお礼を申しにやってきた。かくて磬嶋は九十余才まで長生きをした。（以下はつぎのごとき景戒の結びのことはで終っている。）

大唐の徳玄は、般若の力を被りて、閻羅王の使に召さるる難を脱れ、日本の磬嶋は、寺の商の銭を受け、閻羅王の使の鬼の追ひ召す難を脱る。花を売る女人は、切利天に生まれ、毒を供する掬多は、返りて善心を生ずといふは、其れ斯れを謂ふなり。ここに磬嶋と対比されている「大唐の徳玄」について、狩谷椽斎の『日本靈異記攷証』は「太平広記報応部載云出報応記」と説明している。ところが岩淵悦太郎氏によれば、^⑤『報応記』は靈異記よりは後に成立したもので椽斎の説は正しくなく、徳玄とは唐の孟獻忠の撰になる『金剛般若経集験記』の上巻救護篇に出てくる人物であり、しかも靈異記上巻の序文にある『般若験記』とはこの『金剛般若経集験記』（以下『集験記』と略記する）のことであると説いている。念のためここに上巻の序文の該当部分を引用してみよう。

昔漢地に冥報記を造り、大唐国に般若験記を作りき。何ぞ、唯他国の伝録に慎しみて、自主の奇事を信け恐り弗らむや。

これによると景戒は明白に『集驗記』を知っていることになり、さらに一步進めて云えば景戒はこの書所収の話を原拠として磐嶋の話を形成したと云えよう。

『集驗記』は上巻の救護篇十三に徳玄の話載せている。これも長い話であるから要旨だけを記してみよう。

徳玄が楊州の按察になり淮水を渡るとき、一人のしよげた者を見てあわれみを感じ、船に乗せ食事を与えた。やがて船を降り馬で道を行くと例の者がついてくる。「お前は誰だ」と聞くと、「冥府の王の使いの鬼で、貴君を召しにきたのだ」と云う。徳玄は「何とか免れる方策はないか」と頼みこむのだが「貴君は食物をくれたのだし、俺はひとまず消え失せよう。ただし金剛波若経を一千遍誦したらまた相談にこよう」と答える。楊州にて徳玄がお経を読み終わると、鬼があらわれ「ともに王に会おう」とて徳玄を具して冥府へ行く。しかし結局は許されて徳玄は娑婆へ立ちもどった。のち鬼がまたあらわれ食物と金を請求するとともに、徳玄には道士を招いておはらいをすることをすすめる。何回もおはらいをしたのち、徳玄は自分の今後の位や寿命についてたずねた。「現在の宗正卿よりつぎつぎに昇任して左相になり、六十四才まで生きるであろう」と鬼は云った。徳玄のその後の生涯は鬼の予言とおりでであった。

これら中国と日本の両話を比較しながら、中巻二十四話の形成を論じよう。前者に出てくる人物は、徳玄と鬼一匹、冥府の王、冥府の紫の衣を着たる人、道士で、徳玄を除いては實在性がうすく、また個性味もない。それに対し後者に出てくる人物は、磐嶋と鬼三匹、率川の社の許の相八卦読、沙弥仁耀で、鬼以外は實在性が考えられる。そこで沙弥仁耀であるが、彼は『元亨釈書』第十二、忍行の部に「つぎのごとく記されている者で、奈良時代から平安初期にかけて實在した僧侶である。

釈仁耀。姓石寸氏。和州葛木上郡人。幼歳雜染。姿儀卑矮。

取_レ悔_ヲ。路人_ニ。而不_ニ以_テ介_レ懷_{。性慈愍。餓_ニ身蚤蠹蚊蝱_{。忍_ニ}}

可_レ苦辱_{。遊_ニ心_{。真乘_{。延曆十五年二月卒。歳七十五。}}}

すると大安寺を通じての磐嶋と若かりし頃の仁耀との取合わせは単なる机上の創作と見做すわけには行かなくなる。また当寺が「修多羅分の錢」を蔵していたことは大安寺の資料の示す所であり、「大安寺の南塔院に参る入り」という書き方も詳細である。つまり中巻二十四話のそもその始まりは大安寺にて語られていた奇異なる事実譚とするのが順当であろう。そしてそれはつぎのように磐嶋を主人公にし、仁耀を脇役とした単純な噂話程度のもので推定される。

磐嶋は大安寺の御用商人として寺の金を借りて敦賀へ行った。ところが疫病にかかってしまった。当時疫病は鬼神のもたらす

ものと考えられていたから、懇意にしていた沙弥仁耀を頼んで厄よけのお経をよんでもらった。読経の効果は大いにあり、響嶋の病気はなおって、しかも長寿を全うすることができた。それは響嶋が寺のため尽力したからでもある。

この話が景戒に達し、そこにて第二の変貌をとげて今みる形になったと考えてはどうか。靈異記には大安寺関係の話が六つある。「薬師寺沙門」という肩書を持つ景戒は当然奈良の都を知っていたわけだが、特に彼と大安寺を結びつけたのは沙弥仁耀ではなからうか。何故というにこの仁耀に関して「未だ受戒せざりし時なり」と、本文中に割注があるからである。靈異記において割注を持っている人物や事項は概して景戒と関係の深いものが多い。この割注の意味は仁耀を「沙弥仁耀」と記したことの説明であるが、一步突っ込んで云えば、この話の定着した段階では彼は『元亨釈書』にあるように、高僧として周知の人物であった。そのような人物を「沙弥」と記すのは読み手や聞き手に対しておかしいので、実は若い時の話なのだと説いているわけである。その仁耀は延暦十五年に没した。ところがその前年の延暦十四年には景戒は伝燈住位を得ている（下巻三十八話）。おそらく景戒と仁耀は昵懇の間柄で、しかも仁耀の死んだ延暦年間こそその中巻二十四話は定着されたのであろう。その理由は後に触れるが響嶋の話には延暦期の時代思潮が

靈異記の殺牛祭神系説話

垣間見られるのである。

さて、本論にもどって靈異記と『集驗記』を比較してみよう。まず大きな類似点としては、両主人公がともに旅上にあり冥府の使いの鬼に会う。その鬼に食物を与える。鬼に読経を頼まれる。両主人公ともに天寿を全うするというようなことがあげられる。それに対し相違点は多い。『集驗記』において徳玄は別人を送ることなく本人が一度冥府へ連行されているし、道士なる者が登場し、さらに徳玄の未来については鬼の予言がある。ところがこれらより大きな問題は両話においては鬼の性格が異なり、また靈異記には相八卦読なる者が登場している。

一読して明白なことだが『集驗記』の鬼は暗くしょんぼりと描かれ、牛を食べたりもしない。ところが靈異記の鬼は「汝を召すに日を累ねて、我は飢ゑ疲れぬ。若し食物有りや」とチャッカリしたことを云う。響嶋が干飯を与えると「汝の病は我が故なり云々」と正直そうに応答する。そうかと思うと、「我、牛の穴の味を嗜むが故に、牛の穴を糞せよ」と勝手なことを云う。これらが当時の習俗の上に立って考案された会話であることはすでに述べたが、このように鬼はいきいきと振舞い、人間的に登場している。しかもこの鬼の登場で最も笑いを誘うのは、「一の名は高佐麻呂、二の名は中知麻呂、三の名は植麻呂ぞ」と鬼がそれぞれの名を告げる箇所であ

る。山田孝雄氏の『三宝絵略注』によると、「槌」は土の宛字で最低を意味するとあるから、高・中・槌は鬼の背の順序を示していることになる。このような命名は話の読み手や聞き手にとってはまことに面白い。説話好みの景戒の手腕が発揮されている場面である。これと並んで鬼の出現を伏線とし、中程にて磐嶋の病気は実は鬼の気によるものだと言露する箇所も可笑味がある。ここは話の落ちとも云うべきところであるかもしれない。このような盛りあがりや景戒は机上においてのみなすとげたのであろうか。私は別稿において景戒に遊行僧としての一面を指摘した。三匹の鬼に大中小の名を与えたのは説教という実践の中においてであろう。この創意のうらには聞き手の存在が想定されるのである。説話における創造とはかくのごとき場合を云うのではなからうか。聴衆である民衆の多様な関心を無視しては創造はありえない。説話の狙いは興味や笑いだが、それは聞き手の反応や関心にも依存していると云ってもよい。

このことは「率川の社の許の相八卦読」の検討を通じても主張できるのである。この率川とは春日山より発して猿沢池の南をめぐる、西流して佐保川と合する小川だが、その河畔に式内率川坐大神御子神社とその若宮の率川阿波神社があった。「率川の社」はそのどちらかを指すわけだが、そこに寄食することく「相八卦読」がいたとするのはまことに頷かれる話である。下巻三十八話にてくる天

文事象の記録が見事的中していることから、私は景戒に民間の陰陽師・呪術師の一面をみる者である。おそらく説教師とは呪術師であり予言者でもあったのであろう。「相八卦読」とは同じく民間の陰陽師であるが、これは自度僧くずれとみて間違いないまい。律令政府から出された度々の禁令からみても、かくのごとき輩が都の社寺に寄食していたことは十分に考えられる。自度僧としての経歴を持つ景戒はこのような連中とも交流があったろうし、また民衆もかくのごとき「相八卦読」の存在を知っていた。つまり話し手・聞き手双方承知の人物や事項を取りあげることが説話形成の方法である。説教師景戒はその手にしっかりと民衆の心を掴んでいたのである。

中巻二十五話は「冥報記」下を原拠としている。同じく中巻二十四話が『集験記』に想を得ていることは間違いない。しかし大安寺を中心とした事実譚への立脚、当時の信仰や習俗の摂取、さらには説教という実践活動を経過して、この話が興味深い説話として定着されたことを見失ってはならぬ。本話形成の秘密はこのようなところに隠されているのである。いわば大安寺に語られていたものは一つの素材であった。また『集験記』は一つのヒントであった。その素材やヒントを生かし、いろいろな場面を面白く組立て、その時代に合った着色を施して結晶させたのが景戒である。それはもう大安寺内部という狭い範囲に向けられたものではなく、外來說話の翻案

でもなく、当時代に生きる民衆という広い層に話しかけるいきいきした説話文学であった。

芳賀矢一氏は『攷証今昔物語集』の序論にて

斯して平安朝の初、延暦年間には、冥報記、冥報記拾遺等に収められた説話と同形式のものが、地名と人名とを日本に改め、日本霊異記となって現れるまでになった。

と述べている。それに対し岩淵悦太郎氏は前記論文にて多少の批判を浴びせながらも、鶯嶋の話に関してはこの見解を認めんとしている。しかしすでに明らかなごとく中巻二十四話については芳賀説は通用しない。むしろわれわれはこの説話に関しては景戒は翻案者ではなく、作者になっていることを認めるべきであろう。

(三) 道場法師系説話と殺牛祭神系説話

佐伯有清氏の説くところによれば、延暦時代に民衆が祭った漢神とは怨霊神であり、かかる怨霊神を祭ることは八世紀前半頃から起り、その盛行をみたのは桓武天皇の延暦期である。つまりこの時代には不幸な死に方をした早良親王をはじめとして、他戸皇子・井上内親王などの怨霊が祟りをなすと考えられ、民衆はそのような政治的敗者に同情しながらも特定の亡魂を祭らないで、祟りの神として一般化された漢神を祭った。そして牛を殺して漢神に捧げて怨霊を

霊異記の殺牛祭神系説話

なくさめ、その祟りを国家の支配者（桓武天皇）に転じようとしたという。^⑦

すでにみてきたごとく中巻二十四話には、たとえ鬼神の祟りで病んでいる者でも鬼神に饗応したり、牛肉を与えれば、祟りを免れたり他の者へ転嫁できるという考えがあった。この考えと延暦期の民間における怨霊思想とは別個のものではない。鶯嶋の代りに冥府へ連れ行かれる「相八卦読」を国家の支配者にかえたら、これはそのまま延暦時代の怨霊思想につながって行く。一方、現に景戒は下巻三十八条にて童謡を載せながら桓武の登極にふれ、桓武とその同母弟早良親王の長岡遷都を記し、さらに藤原種継暗殺事件に言及している。この種継暗殺事件とはそれに連座し、やがて淡路へ流される早良親王の死をも意味していると云えよう。

天文観測を通して長岡遷都（延暦三年）と種継暗殺事件（延暦四年）を予知した景戒は続く延暦六年に「慚愧の心を発」しながら一大回心に向かう。つまり景戒の回心は早良親王の不幸な死という騒がしい風潮の中で行なわれるわけだが、私はこの回心が霊異記の編纂へつながって行くとみる者である。たとえば延暦六年にみる夢に観音に係わることが詳しく述べられているが、それに符合するかのよう^⑧に霊異記には観音信仰を背景を持った説話がかなりある。また下巻の序文も延暦六年という年を強調している。だから霊異記の中

に怨霊思想の投影があるのは当然のことと云えよう。中巻二十四話についてはすでにみてきたが、仁禰法師が没して四年後の延暦十九年が、例の早良親王を崇道天皇と追称した年で、いわば怨霊思想盛行のクライマックスであった。そしてまた延暦期の世相をかなり描いている景戒の自伝はこの延暦十九年をもって終っているのである。

さきに引用した中巻二十五話の冒頭も、守屋氏によって道饗祭・御門祭との関連を指摘されており、その指摘は正しいが、やはり怨霊や鬼魅を追いはらおうという意図はみえている。中巻五話は正面から殺牛を取扱い、それがまた始めにふれた延暦十年と二十年の禁令に内容が合致しているのである。その上、中巻二十五・中巻五の両話とともに『冥報記』を原拠として形成されたものであるから景戒の手になる公算は強い。中巻一話の事件は天平元年のことではあるが不幸な死であり、その気が祟るとあるのは明らかに怨霊思想の前ぶれであろう。しかもこの話には景戒の郷国の伝承が加わり、また延暦十年の禁令には『紀伊等国百姓』も含まれている。景戒は富豪な百姓たちが牛を殺しながら饗宴を張る騒ぎをまのあたり経験したのである。要するに殺牛祭神系説話は延暦期の中央や地方の怨霊思想と関連があり、またこれらの説話の背後には景戒の存在が考えられる。

前記論文にて佐伯氏は殺牛祭神の行なわれた理由として、主に(一)雨乞いのためと、(二)祟りを祓うための二つをあげ、しかもこの二つを切りはなし後者に力点を置いて説いている。一方、林屋辰三郎氏はこの見解を認めながらも^⑥

このように殺牛祭神の信仰は、佐伯氏の説くように、雨乞いと祟りを除くことの大きなちがいをたしかに混同してはならないが、しかしこの両者は日本においては同一平面上の転化ではないにしても、やはり同一信仰の飛躍であったと解すべきであろう。それというのは、さきにもふれた天神の場合においても雷神信仰に雨乞いから怨霊への飛躍があったからである。

と説明しているが、穏当な見方であろう。すると靈異記の説話においても、雷神信仰と殺牛神信仰とはかけはなれたものとは云えなくなる。靈異記において雷神信仰を背景に持っている説話は上巻一話、上巻三話、中巻四話、中巻二十七話であるが、一般には上巻二話も含めて考えられており、これらが所謂道場法師系説話である。

しかもこの系統の説話が一旦明日香の元興寺に運ばれ、後に道場法師の話(上巻三話)を中核として配置され、景戒とも靈異記の編纂とも特別な関係にあることはかつて説いたとおりである。^⑦今これに加うるに殺牛祭神系説話を見出しうることは靈異記の性格や成立の問題の解明に示唆を与えるであろう。現に上巻一話には「此の雷

悪み怨みて鳴り落ち、碑文の柱を踊^く多^た踐^たみ」とあり、道場法師系説話から殺牛祭神系説話への橋渡しもみられるのである。

四 靈異記の編纂と景戒

ここに靈異記の編纂の問題に一寸ふれてみよう。雷神信仰は怨靈思想の一母胎であった。道場法師系説話が上巻一話から始まり主に上巻の始めにかたまり、殺牛祭神系説話が中巻一話から始まり中巻にすべておさまっているのは景戒の意識によるものであろう。道場法師の話は諸書にかなり多い。その中で靈異記の上巻三話がきわだつた特色を持っているのは、一つには延暦期の思潮に動かされるものがあつたからであらう。かくのごとく延暦期は靈異記成立上のエポックである。なるほど下巻三十九話には「今、平安の宮に十四介年を経て、天の下治めたまふ賀美能の天皇是れなり。」とあるから靈異記の最終的完成は弘仁十三年（八二三年）とみられる。しかし景戒の自伝を含む最後の年号である延暦十九年（八〇〇年）からの年まで二十二年間、靈異記は全くの空白である。因みに述べれば宝亀（十一年間続く）の年号を持つ説話は下巻十六話から三十話まで順次十五ある。次の天応（一年間のみ）はなく、ついで延暦（二十四年間続く）の説話は下巻三十一話から三十八話まで順次七つあ

る。それが大同（四年間続く）をすぎ、さらに弘仁十三年まで全くないということは何を意味するであらうか。下巻三十九話は単なる増補とみてとつてよいであらう。靈異記の成立とは延暦年間を中心に検討されるべきである。道場法師系説話・殺牛祭神系説話の存在はこのことを立証している。

つぎに靈異記編纂の場所の一つとして私は明日香の元興寺に注目してきたが、すでに一部見てきたように下巻三十八話は靈異記の編纂とからんでいる。しかもこの条の後半の事項は多く紀伊国名草の郡に係わっている。靈異記編纂の拠点として元興寺とともに名草の郡を考えてみたい。無論景戒の編纂の事業は孤立したものではないであらう。仲間として多くの自度僧があり、さらに明日香の元興寺、奈良の大安寺・薬師寺などは景戒に説話を提供したことであろう。だが靈異記にみられる地方的性格、景戒に感じられる在野的精神と泥くさい人間味、これらは景戒の生活の基盤が紀伊の国名草の郡であつたことを物語っている。

殺牛祭神系説話の考察はこのように大きな問題を含んでいるが、さらにわれわれの興味を誘うのは磐嶋の話で發揮された景戒の作家的手腕である。この話においては景戒は編者というよりは制作者である。説話集に関しては一般には編者又は撰者という語が使われているが、これらの用語を乗りこえて「作家」ということを云つてい

るのは西尾光一氏である。西尾氏は『今昔物語集』を始めとする仏教説話集や説話集に「作家」を見出さんとしている。その研究の姿勢は正しいと云えよう。ところが『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』に予想される作家（又は作家たち）よりも、靈異記の場合はいろいろな資料に恵まれている。上中下の三巻に付せられている三つの序文、各説話にある結びのことば、そして何よりも下巻三十八話の自伝。これらについての綿密な考究が進むと景戒の作家像もかなり鮮明になる。

今はそれほど準備はないが馨嶋の話を通して景戒の想像力の使い方、彼なりの感情の起伏はある程度把握することができよう。少くとも景戒は遠く商売に出た馨嶋が病を得、仏の力にすがろうとした話に共鳴し、その話に基づきながら馨嶋の周りにあれこれの人物を点綴させたのである。景戒の先祖が水先案内の吉士よしで、その一族が後に猶君氏のように商人化したとする私の想定が許されるのなら、景戒と馨嶋は一層結びつく。景戒は身を入れて本話を制作したことになろう。琵琶湖岸を追いかけてくる鬼の様相は会話を通していきいきと描かれている。また馨嶋と相八卦読をともに戌寅の生まれとした着想も奇抜で面白い。しかしもっと大事なことは冥府の使いとして最も人に嫌われている鬼が、名前を持っていたり、施しに對し恩を感じたりする点である。しかもその鬼は真昼間大路を闊歩

し、臆面もなく牛を要求する。だがこの鬼たちに少しも暗さやいやらしさがない。ここに作者景戒の人間性がうかがわれる。感覚の凶太い、大らかな人間をここに感じる。しかもこの作者は自分の作った話に己自身も悦に入りつつ、聞き手・読み手とともに笑っているのである。その態度はまことにあけすけと云えよう。人間景戒に眞摯な求道者を見るという従来の見方が誤っているといえるのではない。ただ傍証資料の多い中巻二十四話を検討してみると、かくのごとき一面を持った作家景戒が浮かびあがってくるのである。このようなプロフィールはおそらく景戒以降の説話作家にも指摘できるものであろう。

注

- ① 詳しくは拙稿「ヤマトタケル伝承の基礎的考察」(『文学』昭和四十二年四月号所収)参照。
- ② 土橋寛「氏族伝承の形成」(沢瀉博士喜寿記念『萬葉学論叢』所収)。
- ③ 狩谷椽齋全集第一の『校本日本靈異記』には「汝病な我氣わが故不な依よ近ぢか」とある。
- ④ 拙稿「靈異記の編者景戒をめぐる」(『古代文化』第二十五卷七・八合併号所収)。
- ⑤ 岩淵悦太郎「日本靈異記の序に見えたる般若検記とは何か」

〔国語と国文学〕昭和十年八月号所収。

⑥ 注④に同じ。

⑦ 佐伯有清著『日本古代の政治と社会』所収の「殺牛祭神と怨霊思想」

⑧ 駒木敏「霊異記における観音信仰説話」〔同志社国文学〕第九号所収)

⑨ 守屋俊彦「日本霊異記中巻第二十五縁考」〔国語国文〕第四十卷第一号所収)

⑩ 林屋辰三郎著『古典文化の創造』所収の「天神信仰の遍歴」

⑪ 拙稿「霊異記の道場法師系説話について」〔同志社国文学〕第七号所収)

⑫ 拙稿「小子部氏の伝承と一寸法師譚」〔文学〕昭和四十八年九月号所収)

⑬ 西尾光一「説話集の作家たち」(日本古典文学大系『古今著聞集』の月報所収)